

和田 知 久*
Tomohisa WADA*



『中国文芸年鑑』通覧

—各巻の体裁、編纂体制、収録記事とその分類からみた1980年代中国における文芸システム—

Examining the ALMANAC OF CHINESE LITERATURE AND ART :
the system of Chinese literature and art in the 1980s from the style, editorial staff, content,
and classification of each volume

1. はじめに

中国では中央から地方にいたるまで、専門や産業分野ごとに膨大な数の統計報告や年鑑が刊行されている。人民共和国建国以降の前半30年（1978年まで）では、『開国年鑑』（天津進歩出版社、1950年）を嚆矢として合計17種の年鑑が刊行されたものの、いずれも数期刊行された後停刊している。文化大革命中の停滞を経て、1980年代を迎えると中国における年鑑出版事業は活況を呈するようになる。『中国百科年鑑』『中国出版年鑑』『中国歴史年鑑』などはともに1980年の創刊である。1980年から1989年までの10年間に合わせて584種の年鑑が創刊され、なかでも1987年に創刊されたものは120余種にのぼり、1980年代の最高峰を誇った。続く1990年代の10年間では1,666種が創刊され、21世紀に入ってからでも毎年220から270種の年鑑が新たに創刊されているという¹⁾。

昨今は年鑑類の電子化やデータベース化も国家事業として強力に推進されている。中国年鑑ネットワーク出版総庫（China Yearbooks Full-text Database；略称CYFD）として、光ディスク版とネットワーク版が刊行され、1949年以降に出版された合計3,931種、32,370部を網羅し

ている²⁾。また、『中国統計年鑑』のように国家統計局のウェブサイトから無料で閲覧できるよう公開されているものもある（1999年以降のものに限る）。

いわゆる文芸³⁾の分野においては、1981年に『中国戯劇年鑑』『中国文学研究年鑑』、1982年に『中国電影年鑑』が創刊されている。ただ、創刊されても必ずしも継続的な刊行がなされるとは限らない。本稿執筆時点において『中国戯劇年鑑』は一貫して継続刊行され、『中国文学研究年鑑』は1991–1992年巻以降『中国文学年鑑』に改称されて継続的に刊行されているが、『中国電影年鑑』は2011年巻を最後に刊行が途絶えている⁴⁾。

同様に継続的に刊行されなかった文学芸術分野の年鑑に『中国文芸年鑑』がある。ただし上に掲げたものと異なり、『中国文芸年鑑』は「総第1巻」と銘打たれた1981年版から、1982年版、1983年版が刊行された後は3年分飛んで1987年版が出ると、1988年版をもってそれ以降の刊行が途絶えてしまっている。本稿では『中国文芸年鑑』全5巻について、各巻の体裁、編纂体制、収録記事とその分類などに着目しつつ、その特徴や意義について検討し、それらが1980年代中国における文芸システムとどのように関係しているのかを考察する。

*中部大学国際関係学部国際学科

2. 『中国文芸年鑑』を通覧する

2-1 各巻の書誌情報からわかること

奥付などからの書誌情報をまとめると本稿末尾に付した「表」のようになる。1983年版までは「総第□巻」と通し番号がついているが、1987年版、1988年版にはついていない。出版社、発行所、印刷所は全て同一である。文化芸術出版社は1980年に北京で設立された出版社で、文芸作品、芸術史、芸術教科書、芸術科学工具書（工具書とは、年鑑をはじめ辞書、百科事典、索引などのこと）関連の著作や翻訳を出版する。編輯者は中国文芸年鑑「社」（81～83年、以下前期と呼ぶ）と中国文芸年鑑「編集部」（87、88年、以下後期と呼ぶ）と表記が異なるが、所在地が出版社と同じことから考えると、文化芸術出版社内の1セクションと考えてよいだろう。装丁は上製で、サイズは16開本⁵⁾でB5版あるが、字数について言えば後期は前期の約半分の分量になり、それに応じて印張が減少するも、88年版の価格が81年版の約3倍になっているのは、改革開放経済の進展によるインフレーションのせいでもあろう。出版年は、81年版が82年9月、82年版が84年9月、83年版が85年12月、87年版が88年8月、88年版が91年12月に刊行されている。出版間隔は、81年版から82年版までがちょうど2年後に刊行されているが、82年版から83年版までが1年3ヶ月、83年版から87年版が2年8ヶ月、87年版から88年版までが3年4ヶ月かかっている。

書誌情報から分かったことは、全5巻の『中国文芸年鑑』は紙幅の変化はあるにせよ、同じ体裁で、同じ編輯者により、同じ機関から刊行されたということである。

編輯者の顔ぶれについても触れておきたい。81年版から83年版までの「主編（編輯長）」には、蘇一平⁶⁾と白鷹が併記されている。

1987年版と1988年版の主編は李希凡である。いずれも中国共産党員であり、中国芸術研究院の副院長であるが、前の2者は抗日救亡運動から革命に身を投じた古参幹部であるのに対し、後者は人民共和国成立後に高等教育を受けた新しい世代に属している。また前者が文芸工作方面の革命家然とした経歴の持ち主であるのに対し、後者は中国古典小説の研究者、評論家である。1983年版が刊行された1985年、中国芸術研究院副院長が交代する1986年あたりを境界にして党・文芸界の世代交代がなされたような感がある。その他、81、82、83年版までの「責任編輯」周明は『人民文学』常務副主編、中国現代文学館副館長を歴任した「編審」（編輯業務に携わる者のランクで最上位の職階名）であり、散文や報告文学の著作もおこなっている。「責任編輯」は87、88年版には見られず、その代わりに「編集部主任」が置かれている。また、82、83、87年版の「編輯（一般編輯者）」、88年「編集部副主任」と最も多く本年鑑編纂に携わっている汪国真是1990年代初頭に熱狂的な恋愛詩ブームを巻き起こしたことで知られる詩人でもある。

以下、各巻を見ていきたい。

2-2 1981年版（総第1巻）

「表」にもあるように、『中国文芸年鑑』1981年版は「総第1巻」として1982年9月に刊行された。巻頭に主編である蘇一平による「発刊詞」が置かれている。1ページ、900字弱の短いものであるが、本年鑑刊行に至る経緯が書き込まれている。まず始めに、「全国の人民は、党の11期3中全会の正確な路線の導きの下で、各種の工作において大きな進展を勝ち得ており、巨大な成果を獲得している」として、一方で「文芸戦線」においても「全国第4次文代会⁷⁾後の80年代初めの春に、文芸は斬新な容貌と艶やかな姿態、たわわな成果をもってして、

非常に素晴らしい印象を人を与えている」と刊行に至る政治状況に言及した後、高らかに「建国以来初」の『中国文芸年鑑』の刊行を宣言している。

続いて刊行の実際的な目的として、近年の「文化芸術」（「文学芸術」ではないことに注意したい）分野の発展と文芸創作の隆盛につれて、「適切な資料を検索したり、具体的な状況を理解しようとする」ための工具書の必要性が高まってきたからとしている。編輯にあたっては「資料の膨大さと状況の複雑さに鑑みて、我々は可能な限り系統立てて、レベルに応じて、種別ごとに科学的方法と体裁に則って収集と整理を進め、それによって文芸創作、文芸研究、芸術公演、芸術教育、文芸行政工作、中外文化交流および文化芸術に関連するその他事業の従事者のために、使いやすく便利なものとなるようにした」という。

ここで類書として1934年刊行の『中国文芸年鑑』に言及している。これは楊晋豪編纂、上海北新書局出版のものを指しており、34年のほかに35、36年と刊行されている。また、これ以外にも1932年刊行の『中国文芸年鑑』（上海現代書局）も存在している。こちらのほうは杜衡、施蛰存が「中国文芸年鑑社」の名義で編纂したもので、特に「第一回」と銘されている⁸⁾。1981年版「発刊詞」に戻ると、「30年代から、あるいはより古い時代から、年を追って文芸年鑑を出していたならば、我が国の文化芸術の発展史にどれほどの重要な影響を及ぼしていたかなどは、想像するに難くない」とも言っている。また、最後の部分では「広範な読者と関係各方面の大いなる支持と助力の下」、「必ずや“昨日の記載、今日の鏡、明日の抛り所”と称賛されるに愧じぬものとなることを我々は堅く信じている」として、断絶こそあるが、先達に続く者としての意気込みがうかがえる。

「発刊詞」の裏頁に「編輯説明」が掲げられ

ている。十条にわたって81年版の体裁について記している。冗長になるが各条文を追ってみる。

一、『中国文芸年鑑』は、我が国の当代文化芸術状況を反映する文献であり、資料的な工具書である。本版の年鑑は「特（別掲）載」「文芸紀事」「文芸百科」「中外文化交流」「概況」「付録」「図片挿入頁」などの部分により構成されている。

二、「特載」欄には、この二年間に発表された党と国家指導者、文芸界責任者による文芸工作に関する重要な講話や文章を収録、掲載している。

三、「文芸紀事」欄は、1980年の文芸界の重要な活動を記載している。

四、「文芸百科」欄は、総類、文学、芸術、科学文芸の4部分に分かれている。「文学」は、総類、小説、詩歌、報告文学、散文、民間文学、児童文学、少数民族文学、外国文学、現代作家及びその作品研究、紅樓夢研究の11のカテゴリーに分かれている。「芸術」は、総類、戯劇、映画、音楽、舞踏、美術、撮影、書道、曲芸、雑技、木偶、影絵、テレビドラマ、芸術教育、大衆文化、少数民族文化、文化科学技術の17のカテゴリーに分かれている。文学・芸術の各カテゴリーは、「解説と評論・専論」「総述・情報」「問題討論」「專題資料」などの特設コラムに分かれている。

五、「中外文化交流」欄は、中外文化交流をテーマとする文章の他に、さらに「大事記」の形式でカテゴリーごとにそれぞれの文学芸術分野での中外文化交流状況を記載している。

六、「概況」欄は、全国の文学芸術単位の行政組織に従って、文化部直属文芸系統、対外文委直属単位、国家文物局直属単位、国家出版局直属単位、中国社会科学院文学研究所および出版単位、國務院のその他の部（委員会、局）直属の文芸単位、中国人民解放軍文芸単位、中国

文聯および各協会、全国的なその他の文学芸術大衆団体と29省、市、自治区（台湾省は暫時除く）の文芸系統の合計38部分に分類している。

七、「付録」欄は、文化部などの部門の文化工作に関する通知や全国の文芸単位の一覧などを載せている。

八、「図片挿入頁」は、党・国家指導者と文芸工作者が一緒に写っているもの、文芸界の指導者と文芸工作者が一緒に写っているもの、および文学、戯劇、映画、音楽、友好往来などのテーマの頁に分かれている。

九、本年鑑の配列分類方法は、「概況」欄では全国行政区分ごとに配列している。文芸単位によっては、各々関連部門が審査決定した順序に従って配列している。その他の欄ではそれぞれ「図書」などの関連する分類法と実情に基づき配列している。

十、本版年鑑の内容は、1980年度の文芸界の基本状況を重点的に収録したほか、それぞれのカテゴリーでは、建国30年来、とりわけ「四人組」粉砕以降の重要資料も収録している。

以上であるが、第十条でも断っているように81年版では「建国30年来」の「重要資料」も収録していることが特徴的であるが、そのほとんどが「図片（写真）」であり、政治的な文書（指示、講話、規則など）は皆無である。ただ「特載」欄に毛沢東、周恩来、劉少奇、陳毅の講話や文章⁹⁾が掲載されており、それぞれ1956年、62年、56年、61年に行われたものであるが、注釈などで示されているように雑誌『文芸研究』で79年、80年に発表されたものであり、「編輯説明」にあるように「この二年間に発表された」というのに符合している。

「文芸百科」欄は、総類、文学、芸術、科学文芸の4つに分かれている。先述の通り「文芸」は「文学」「芸術」を指すものであり、「発刊詞」のように「文化」「芸術」ではない。「文

学」が上記11カテゴリーに分けられていて総頁数が137頁（pp. 188-325）であるのに対して、「芸術」は17カテゴリーに分けられていて総頁数が405頁（pp.326-731）であり、「科学文芸」は総頁数が9頁（pp.722-731）となっている。「文学」が小説、詩歌、報告文学とジャンルに対応したカテゴリー分けであるのに、「芸術」は戯劇、映画、音楽などといったカテゴリー分けであることから、「文学」分野の偏重がうかがえる。ちなみに「芸術」分野の「文化科学技術」とは、映画の野外撮影用のライトやフィルムの現像法など、この分野に関連する科学技術のことである。また紙幅が少ないながらも「科学文芸」が独立して立てられていることは注目したい。「科学文芸」とは科学知識普及のための論文や散文、小説や詩を指す。いわゆる Science Fiction は「科学普及小説」であり、この分野に属する¹⁰⁾。

「中外文化交流」欄は、文化大革命収束後に海外との文化芸術交流が再開され盛んに行われるようになったことを背景としている。「概況」欄は上記のような分類に従い、文芸関連社団の概要と現況についての記載がある。「付録」欄は、「概況」欄で触れられたものも含めた中国共産党直属や省級から県級にいたるまでの劇団、音楽団、雑技団などの文芸団体と教育・研究機関、出版社などの一覧である。

最後に編後記（編輯後記）を見ておきたい。「毛沢東同志『延安文芸座談会における講話』発表40周年を記念する日に、一年あまりの努力を経て『中国文芸年鑑』（1981）はついに広範な読者にお目見えすることとなった」の一文から始まる。文末に付された日付、1982年5月23日は、ちょうど遡ること40年前に毛沢東が第3回会議の席上で「結論」部分の講話を行った日である。その他には、本版年鑑の不備に対するお詫びと編纂作業に参加、協力した人々や団体への謝辞が見られるのみで特筆すべきことは

ない。

2-3 1982年版（総第2巻）

『中国文芸年鑑』1982年版は、81年版から2年後の84年9月に刊行された。奥付によると、印張は80から67.75へ、字数は2,200,000から2,030,000へごくわずかながらボリュームダウンした形での「総第2巻」であった。

巻頭に掲げられた「致読者」には、李大釗の口語詩¹¹⁾と「我々は“昨日の記載、今日の鏡、明日の抛り所”を主旨として、中国文化芸術の偉大なる変革時期に、旧きを除き新しきを立て、先人を受け継ぎ未来を拓き、活気漲る、隆盛極まる時代の豊かな実りを綴り集めて1982年版『中国文芸年鑑』を編纂し読者へお届けする」と81年版「発刊詞」の末尾の言辞を継ぐ形で始められている。そして「各方面からの懇切な批評と建議」を参考に、82年版には「編年史としての性質を明確にし」「見やすく、論理的で、検索しやすいレイアウト」になるよう改良を加えたという。後者の意味するところは文字通りであるが、前者は「史書ならば史実をもってその抛り所とするが、歴史的資料の単なる寄せ集めであってはならない」として、この一年の主要な出来事や重要な文献、文書や写真、統計資料を多く掲載するとともに、文化芸術分野全体、あるいは個別のジャンルについての指導的な専門論著や概括的な文書を適切に収録することで、従来の理論的な解釈と個々の豊富な資料とが関連付けられるように心がけたのだという。

具体的には「特（別掲）載」「文芸紀事」「文芸百科」「中外文化交流」「図片挿入頁」に加えて、新たに「文化芸術工作文献選載」部分が設けられており、中共中央や国務院、文化部（部は日本の省に相当）から出された通達や意見文書71篇が収録されている。「特載」の46篇も併せると、収録されている文献、文書の数

81年版よりもかなり多い。81年版の「特載」部分は先述のように毛、周、劉、陳に加え、刊行当時の中央の政治指導者鄧小平、胡耀邦から文芸部門の指導者の講話、文書が16篇と、巻末近くの「資料」部分に文化部などからの通達が6篇掲載されているだけであった。

「文芸百科」部分について言えば、81年版の「総類」「文学」「芸術」「科学文芸」の4部門に、「群衆文化」「部隊文芸」「少数民族文化」「芸術教育」「少年児童文芸」「文化科学技術」「図書管理」「出版」「文物」の9部門が追加されているが、これらの半分ほどは81年版では「芸術」部門の下位に分類されていたカテゴリーであり、新たに加わったのは「部隊文芸」「図書管理」「出版」「文物」の4部門である。「中外文化交流」「図片挿入頁」部分の体裁、構成については異同が見られなかった。

「編後記」では、編輯部に寄せられた意見や激励、協力者に対する謝辞および遺漏と不足に対するお詫びの他に、82年10月19日に文化部主催による『中国文芸年鑑』座談会が行われたことが記されている。文芸界の著名人40数名が招聘されたこの座談会では、81年版の刊行を記念して活発な討論が行われたとのことである。また、「編後記」の後に「中国文芸年鑑特約通訊員名簿」として全国29省自治区直轄市の「特約通訊員」の氏名と所属が挙がっていて、「文化局芸術処」「文化庁芸術処、戲劇処」「群衆芸術館」などの所属が確認される。

2-4 1983年版（総第3巻）

『中国文芸年鑑』1983年版は、前年度版刊行から1年3ヶ月後の1985年12月に刊行された。刊行のペースはやや縮まった。印張は67.75から70へ、字数は2,030,000から2,170,000へとほぼ同様の分量での「総第3巻」となった。

巻頭には「中華人民共和国国歌」の五線譜と歌詞が掲載されている。なぜ国歌が掲載されて

いるのだろうか。それは、本巻が扱う1982年の12月4日、第5期全国人民代表大会第5回会議においてこの曲を正式な国歌とする決議がなされたことと関係がある。聶耳作曲、田漢作詞のこの曲は、映画『風雲児女』の挿入歌となり、人民共和国成立時の中国人民政治協商会議第1回全体会議で「代国歌(国歌に代わるもの)」と決定された。その後、文化大革命時に田漢が迫害死すると、「叛徒」作の詩は使用されなくなり、文革後も新たに当てられた歌詞で歌われていた。82年12月の決議をもって、歌詞が田漢作のものに戻されたことを記念して巻頭に掲げられたのであろう。

そして「編輯説明」であるが、82年版と異なり目次の後に置かれている。「特載」「文化芸術工作文獻選載」「文芸紀事」「文芸百科」「中外文化交流」「図片」といった分類は82年版と同じである。ただ「文芸百科」欄は82年版が13部門に増えていたのに対して、「総類」「文学」「芸術」「文化」と再び4部門になっている（ただし81年版は「文化」ではなく「科学文芸」であった）。「総類」は、「マルクス・レーニン主義文芸理論研究」「毛沢東文芸思想研究」「美学研究」「文芸理論研究」に下位カテゴリーが設けられている。「文学」は、「文学史研究」「文学理論研究」「文学作品研究」に分けられており、「文学作品研究」の下位には「古代、近代文学研究」「現代、当代文学研究」に、さらに「現代、当代文学研究」の下位には「総類」「茅盾文学賞」「小説」「詩歌」など13に類別されており、多様なジャンルを複雑に分類している上に、研究情況の紹介に重点を置くようになったのが大きな変化として指摘できる。「芸術」は、「美術」「音楽」「舞踏」「戲劇」など11分類に分けられている。新設の「文化」は、82年版で追加された9部門を82年版で言うところの「科学文芸」部門に再び組み入れて作られたものである。「中外文化交流」「図片」部分の体裁、構成につ

いては異同が見られなかった。注目すべきは「特載」である。

83年版の「特載」には、党と国家の指導者の講話や文章の前に、レーニン「党の組織と党の出版物」が掲げられている。その後に中共中央編訳局レーニン・スターリン著作編訳室署名の『『党の組織と党の出版物』の中国語訳はなぜ修正が必要なのか?』という文章が付けられている。元々この2篇は中共中央委員会発行の政治理論誌『紅旗』1982年第22期に掲載されたものである。中央編訳局の文章の冒頭一段落は以下のようにになっている。

レーニンが70年以上前に書いたこの文章は、字数は多くないが、影響は大きい。我が国では30年代以降多くの訳文があり、しかも様々な作家による文芸を論じた専門書に収められている。しかし、我が局の訳文も含めて、全ての中国語訳の、ある重要な部分がずっと不適切なままであるために、いささかの誤解を引き起こしている。例えば、文章の標題と文中の“партийная литература”（後ろの語には文学、文献、出版物などの意味があり、ここでの意味は新聞、刊行物、書籍などを含む出版物である）という言葉が、現在通用している中国語訳では全て「党の文学」となっている。このような示し方では、文学という社会文化現象が党の付属物であると誤認されやすい。そのため、我々は訳文に新たな校訂を加えてこれまでの誤訳を改め、併せて我々の認識に基づき、この文章が書かれた背景や中心的内容、翻訳上の処理について、簡要な説明をおこなう必要があると認識した。

要点としては、レーニンの著作の中に「字数は多くないが、影響は大きい」ものがあり、「全

ての中国語訳の、ある重要な部分がずっと不適切なままであるために、いささかの誤解を引き起こしている」のだという。「例えば」として標題にも用いられている“литература”という語を挙げて、この語がこれまで「文学」と訳されてきたがために、「文学という社会文化現象が党の付属物であると誤認されやすい」状況が生じているというのだ。

この文章の「影響が大きい」理由は、ひとえに毛沢東「延安文芸座談会における講話（文芸講話）」に引かれているからである。そして「誤認されやすい」のではなく、文芸講話が絶対視された文芸システムの下では、文学は「党の付属物」であることは揺るぎない事実であった。文芸講話がおこなわれて40周年を記念する1982年に、従来の文芸観の再検討がおこなわれようとしたのである。

実は、国歌の裏頁（目次の前）には「文芸工作者公約」が掲載されている。これは中国文学芸術界联合会（文聯）第4次全国委員会第2回会議で通過決定されたものであることが書き添えられてある。冒頭の三条を訳出すると以下の通りとなる。

一、祖国を深く愛し、人民に忠実で、4つの基本原則を堅持し、全身全霊で人民に服務し、社会主義に服務し、「百花齊放、百家争鳴」の方針を正確に貫徹し、社会主義精神文明の建設により貢献せよ。

二、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想を真剣に学習し、新時期の人民大衆の闘争生活に深く入り、思想面の覚悟と社会に対する責任感を不断に向上させ、広範な人民大衆と結合せよ。

三、芸術面での修養を積み、芸術的技巧を磨き、中外の文化遺産を批判的に学習し、人類の創造した知識の成果をもって自らの頭脳を豊かにし、人民に服務するための職

業的水準を不断に向上させよ。

と始まり、第四条では「良質な思想芸術と鮮明な精神的糧食でもって人民の文化的需要を満足させよ」、第五条では「批評に正しく向き合い、大衆の意見を虚心に聞き、勇気を持って真理を堅持し、過ちは修正せよ」、第六条では「職業道徳を重んじ、思想態度を正せ」、第七条では「文芸隊伍の団結を強化せよ」、第八条では「新たな力を育成し、若い世代を盛り立てて、社会主義文芸隊伍の促進派を強力にし、発展させよ」で締めくくられている。何気ないありきたりの就業心得のようであるが、この「公約」の掲載は、レーニンの著作の修正とも関連があり、中国の文芸史においても特別な意義を持つ。

このことについて劉錫誠の言及¹²⁾がある。1982年6月19日から25日にまで開催された文聯第4期第2回全国委員会は、1979年の中国文学芸術工作者第4次代表大会（第4次文代会）後の初めての全国委員による会議であり、参会者による討論を経て、「文芸工作者についての若干の意見」と「文芸工作者公約」が制定され盛会のうちに幕が閉じられた。また、会議の席上で、中央編訳局によるレーニン「党の組織と党の文学」改訳と再解釈の過程についての文章と、新訳された「党の組織と党の出版物」が配付されている。閉幕当日夜に開催されたパーティーにおいて、中共中央書記処書記であり党のイデオログである胡喬木による「文芸と政治の関係に関するいくつかの問題について」という演説がなされた。劉によると、本来予定されていなかったものであるが、この演説によって文芸と政治の関係についての問題が今次会議での最重要議題であったことが明確にされたのだという。

劉は中央編訳局職員の丁世俊の文章を引きながら、この改訳には胡喬木の強い意志が働いていたことを示しつつ修訂に至る経緯を詳細に追

っている。胡喬木は『毛沢東選集』の編纂者の一人で、当時、第2版を出すための修訂作業に当たっていた。また「建国以来の党の若干の歴史問題に関する決議」（1981年6月の中共第11期中央委員会第6回会議にて議決。毛沢東の歴史的な地位を肯定するも、晩年の過ちについては批判する立場を取る）の主要な起草者の一人でもあった。毛沢東は「文芸講話」の2箇所のでレーニンのこの文章を引用しているが、それこそが修訂すべき箇所であったのだという。「党の文学」という「誤訳」を「党の出版物」と新たに翻訳することで、「文芸と政治の関係」という問題において犯してきた過ちと、文芸と政治の関係、文芸についての方針において党中央が見直しをおこなったことを全面的に釈明しようとした。これからは“文芸は政治に服務せよ”とは言わず、“文芸は人民に服務し、社会主義に服務せよ”に改めたのだ”としている。劉によれば、長期にわたって形成されてきた文芸と政治の緊密な関係を緩和するためには、レーニンの經典的な文献の「誤訳」から着手しなければならず、そうしてこそ問題の「根本」に至ることができる。胡喬木は意識したのだという。

そこで「文芸工作者公約」に戻りたい。第一条では確かに「人民に服務し、社会主義に服務し」とあり、第二条でも「広範な人民大衆と結合せよ」とあり、第三条にも「人民に服務するための職業的水準を不断に向上させよ」とある。劉の見解を援用するならば、レーニンの文章の改訳と「文芸工作者公約」の掲載からは、文芸は政治にではなく人民に服務すべきであるという、ポスト毛沢東時代における新しい文芸と政治の関係について規定することを、胡喬木を中心とする中共中央内の文芸政策決定に関与する人々が強く目指していたことがうかがえる。それゆえ『中国文芸年鑑』1983年版においては、「文芸工作者公約」は巻頭に、レーニンの著作

の改訳は特載欄に掲載されなければならなかったのである。

最後に「編後記」を見ておく。全部で500字程度の短いものであり、刊行に当たっての言葉に続いて、「文化芸術工作文献選載」専門項目と「文芸百科」下の「重要講話」専門欄とを新たに設けたことや、欄目の分類方法に調整があったことに言及したあと、関連部局や関係者に対する謝辞で閉じられており、特筆する点は見られない。

2-5 1987年版

『中国文芸年鑑』1987年版は、84年版、85年版、86年版を飛ばして1988年8月に刊行された。「表」を見ても、巻名に示された年度との隔たりでいえば最も短い間隔で刊行されたことがわかる。奥付によると、印張は83年版の70から36.75に、字数は2,170,000から1,150,000と約半分にボリュームダウンしている。この巻からは主編が李希凡、副主編が田丁に代わっている。李希凡は86年11月から中国芸術研究院の初代常務副院長に就任している¹³⁾。また、編輯者の顔ぶれをみても一部異同が見られるが、共通する部分も多く、人数がやや少なくなったこと以外は特筆する点はない。

87年版（そして88年版も）が、83年版までと比較して大きく異なっているのは「巻頭詞」も「編輯説明」もなく、いきなり目次から始まっている点である。編纂に携わった者の動向がうかがえる文章は700字余の「編後記」しかない。87年版「編後記」によると、84年版からの3年分が未刊行であることについて「種々の原因により、数年分の『中国文芸年鑑』の出版が時間的に間に合わず、追いつくために先にこの1987年版を編纂することにした。1984年から1986年の各『中国文芸年鑑』は、今後条件が整ったときに補足的に編纂することになる」と断っている。また「我が国の社会改革の進展

に対応するため、我が国の文芸改革の形勢を反映するため」編輯方針や内容、欄目などを改めたことにも言及している。本巻の分類を確認すると、「文献特載」「文献選編」「緒編」「類編」「中外文化交流」「文芸紀事」「図片挿入頁」の部分に分けられており、「類編」の下に「文学」「戯劇」「曲芸」「映画」「テレビドラマ」「放送文芸」「音楽」「舞踏」「美術」「書法（書道）」「撮影」「雑技・木偶・皮影」「芸術教育」「大衆文芸」「民族文芸」「児童文芸」「図書館管理」「文物」「芸術科学研究」「文芸改革」の20カテゴリーに分けられている。83年版からは「部隊文芸」が消え、新たに劇団制度の改変や芸術団体の企業とのタイアップなどの動向を取めた「文芸改革」が入っている。

2-6 1988年版

『中国文芸年鑑』1988年版は、1991年12月に刊行された。「表」の通り、87年版からの編纂体制にほとんど変化は見られない。ただ前年度版と異なり、巻名に示された年度との隔たりは3年とシリーズで最長である。原因としては、89年「六四天安門事件」後の思想・体制引き締めの影響を受けて刊行が遅れたことが考えられるが、特にそれがうかがえるような記載は見当たらない。中国芸術研究院院長王蒙は、89年に文化部部長を退任し、90年には同研究院院長の職も退いている。

88年版の「編後記」を見ると、出版時期が遅れたことについて「本年鑑に関心を持つ読者に対して我々は慚愧と不安の念を隠せない」と記し、抜けた3年分についても「約束を果たすこと未だ能わず」と読者の了解を願う言葉から始まっている。本年版には、「文献特載」が「緒編」に吸収されて無くなっており、「類編」の下位カテゴリーでは、前年に「文学」とまとめられていたものが「文芸理論」「小説」「詩歌」などと再び細分化されていたり、「木偶・皮影」

から独立して「雑技・魔術（マジック）」が新たに立てられていたり、「群衆文芸」が拡大されて「群衆文化」に変更されていたりするが、分類の基本的概念は87年版とほぼ同様である。ただ「文化芸術管理」欄については、「我が国文芸発展の形勢にともない、芸術への管理工作も不断に強化、改革されているため」新設するに至ったと「特に説明しておきたい」と記されている。本欄の冒頭には「中国の特色ある社会主義の芸術管理学を建設せよ」という論文が掲載されていたり、芸術管理のための研究討論会の開催や、非合法出版の取り締まり、公文書の「統一化、科学化、規範化」推進、社交ダンスパーティーの健全な運営ための通知といった記事を目にすると、改革開放政策の進展により、文学芸術分野においても従来の「規範」を逸脱するような動きとそれへの対応が検討されていたことがうかがえる。

些末なことであるが、1986年に国際標準図書番号を採用したため、「書号」が中国国内の「統一書号」からISBNに変更されている（ISSNではない）。「印数（印刷部数）」も記載されるようになり、初版2,600部（87年版）、1,500部（88年版）であることがわかる。また、88年版には巻末に『中国出版年鑑』編輯部がまとめた「全国年鑑出版名録（1980-1990）」として、全国的年鑑、地方的年鑑と大別して、その下にジャンルごとの一覧が掲載されていることも興味深い。

3. おわりに

各年度の『中国文芸年鑑』を通覧してきて、ここまでで明らかになったことをもう一度確認したい。

文芸（文学・芸術）分野をどう分類し、カテゴライズするかという問題に対して、各年度によって様々な趣向が凝らされていたことを見て取ることができた。1983年版まで「科学文芸」

が「文学」「芸術」と並列して分類されていることなどは、「四つの近代化」路線の下、工業・農業・国防と並んで科学技術の近代化を目指す同時代中国にあって、科学知識普及を推進する手段として当該分野が特別視されていたことの表れであった。また、81年版の「特載」欄に毛沢東、周恩来、劉少奇らの元老級指導者の講話や文章が掲載されていたことや、82年版の同欄には鄧小平、胡耀邦ら当時の政治指導者に加えて文芸部門指導者の講話や文章が掲載されていたことから、文化大革命収束までの文学芸術に対する呪縛から解放され第4次文代会以降少しずつ手にした「創作の自由」を、新旧の最高政治指導者の言辭を推し戴くことによって政治の側からの不断の介入を防御しつつ、その一方で準拠すべき規範として明示することによって自己規制しつつも着実に自らのものとしていこうとする文学芸術界の人々の用心を感じ取ることができるものであった。とりわけ83年版の同欄にレーニンの文章の改訳が収録されたことは、劉錫誠が指摘するように文芸と政治の緊密な関係の緩和を成し遂げようとする中国共産党のイデオログ胡喬木の強い意志がうかがえるものであったし、文学芸術界の人々からすればそのような関係の緩和は心より歓迎すべきものであった。

1988年版の刊行が91年12月になってしまったのは、「六四天安門事件」前後の中国社会の混乱によるものが多少なりともあったのかもしれないが、88年版のそれぞれの収録記事を追ってみても、政治の側からの干渉の痕などは見いだすことはできない。84年から86年までの三年度分の刊行がなされなかったことについては、先に見たとおり本年鑑編纂に割ける人的資源に限りがあったことと、刊行年が巻名年度から隔たってしまったのを「追いつく」ために飛ばさざるをえなかったと考えるのが妥当であろう。ともかく88年版をもって『中国文芸年鑑』

はその幕を下ろすこととなった。ただ中国の文学芸術界の動向をつぶさに収録する年鑑は命脈が完全に絶たれたのではなかった。2007年からは本年鑑の後継と呼ぶにふさわしい『中国文学芸術界聯合会年鑑』が創刊されている。ここまで扱ってきた『中国文芸年鑑』は全国的な年鑑であるが、それ以外にも『北京文芸年鑑』『四川文芸年鑑』などの省級から『紹興県文芸年鑑』のような県級の都市を対象とした地域的な年鑑も各地で刊行されている。

88年版には業界別、地域別に80年代に刊行されたものの一覧である「全国年鑑出版名録」が掲載されており、400弱の各種年鑑の存在を確認できる。我々は『中国文芸年鑑』を通覧することで、1980年代の中国文学の変遷を追体験することができた。現在も中国年鑑網（中国年鑑オンライン）を運営する中国出版協会年鑑工作委員会などといった組織の存在や、中国年鑑網絡出版總庫（CYFD）などのように電子化データベース化され新たな媒体として継続刊行される各種年鑑からは、同時代中国の森羅万象を年次ごとに記録することで“昨日の記載、今日の鏡、明日の抛り所”たらんとする年鑑編纂従事者の意気込みを目の当たりにすることができるのである。

謝辞：本研究はJSPS 科研費16K13213の助成を受けたものである。

表:『中国文艺年鉴』書誌情報一覽

年版	編輯者	出版社	發行所	印刷所	開本	印張	字數	插頁	出版年月	價格	裝丁	書號	主編	副主編	責任編輯	編輯	出版負責人	校正負責人	資料員	編輯部 主任	編輯部 副主任	特邀 編輯	印數
1981 年版 (總第 一卷)	中國文藝 年鑒社 (北京前海西 街17號)	文化藝術 出版社 (北京前海西 街17號)	新華書 店北京 發行所	北京新華 印刷廠	16	80	2,200,000	35	1982年 9月	10.5	精裝	17228001	蘇一平, 白鷹	倪康華, 黎丹	周明	李溪,楊愛倫, 蔣愛虹,張章, 蔡志翔, 張重梅, 齊林,安杰	李金樹	姚真菱					
1982 年版 (總第 二卷)	中國文藝 年鑒社 (北京前海西 街17號)	文化藝術 出版社 (北京前海西 街17號)	新華書 店北京 發行所	北京新華 印刷廠	16	67.75	2,030,000	34	1984年 9月	13	精裝	17228002	蘇一平, 白鷹	齊蘭貞	周明	李溪,侯作卿, 汪國真, 王冰非,仲江, 安杰,朱莉青	李金樹, 羌世璧, 趙英南	姚真菱	郭双义				
1983 年版 (總第 三卷)	中國文藝 年鑒社 (北京前海西 街17號)	文化藝術 出版社 (北京前海西 街17號)	新華書 店北京 發行所	北京新華 印刷廠	16	70	2,170,000	33	1985年 12月	24	精裝	17228003	蘇一平, 白鷹	齊蘭貞	周明	李溪,仲江, 許廷鈞, 汪國真, 侯作卿,安杰, 王冰非, 姚真菱	李金樹, 羌世璧, 趙英南		郭双义, 刘斌				
1987 年版	中國文藝 年鑒編輯部 (北京前海西 街17號)	文化藝術 出版社 (北京前海西 街17號)	新華書 店北京 發行所	北京新華 印刷廠	16	36.75	1,150,000	17	1988年 8月	22		7503901101/Z1	李希凡	田丁		汪國真, 侯作卿, 王冰非	羌世璧, 趙英南		董耘	許廷鈞	安杰	2600	
1988 年版	中國文藝 年鑒編輯部 (北京前海西 街17號)	文化藝術 出版社 (北京前海西 街17號)	新華書 店北京 發行所	北京新華 印刷廠	16	37.75	1,200,000	17	1991年 12月	32		7503910003Z11	李希凡	田丁		侯作卿, 陳勇	冀春發, 趙英南		董耘	許廷鈞	汪國真	安杰	1500

【注】

- 1) 中国年鑑網の記事《从〈中国年鉴总目提要（1949～2011）〉浅析建国以来我国年鉴的出版与发行特点》（<http://www.yearbook.cn/?p=4&a=view&r=402>）による。2018年2月26日確認。

中国年鑑網（中国年鑑オンライン）は中国出版協会年鑑工作委员会が主宰するウェブサイトである。年鑑出版に関するニュースをはじめ、年鑑を研究テーマとする論文、年鑑出版界の功労者の顕彰、関連法規や政策に至るまで、年鑑に関する各種情報を閲覧することができる。中国出版協会は、1979年12月設立の出版界における自由意志によって結成された全国的な団体で、出版従事者全体のための非営利的な社団法人であるが、協会規約に「中国共産党、中国政府と中国出版界との密接な連携のための橋梁と紐帯である」（中国出版協会ウェブサイトによる）と謳うように、國務院隷下の国家新聞出版広播電視総局が主管する組織であり、党と政府の強い影響下に置かれている組織である。

- 2) 中国知網（CNKI）の当該データベース紹介ページより。2018年2月26日確認。
- 3) 文芸とは、日本語であれば「①詩・小説・戯曲など、言語表現による芸術。文学。②学問および芸術一般。学芸」（『大辞林』三省堂）を意味するが、中国語においては「文学と芸術の総称、特に文学や舞台芸術を指す時もある」（『現代漢語詞典』商務印書館、訳は筆者による）とあるように、日本語と意味内容が完全に一致するものではない。本稿での「文芸」の語は中国語における語義に従う。
- 4) 創刊時期がやや遅くなるが『中国音楽年鑑』（1987-2009年）なども同じような例である。
- 5) 開本とは、書籍の大きさ、判型を示す用語で、印刷用紙の全判を基準として、その半分を「対開」、4分の1を「4開」などという。ここでは「16開」なので16分の1。また印張とは、新聞紙の半分大の用紙で書籍1冊に要する紙の量を計算する単位のこと。
- 6) 蘇一平（1913-1995）：陝西西安人。本名蒲望文。1934年に西安師範学校入学、36年に抗日救亡学生運動に参加、37年中国共産党入党。人民共和国成立以前は延安西北文工団指導員から副団長を経て団長と歴任、陝甘寧辺区文化協会組織部副部長、西北文聯秘書長などをつとめる。人民共和国成立後は中央宣伝部文芸処副処長、文化部党組メンバー。文化部の芸術研究機構改組により中国芸術研究院ができると初代党委員会書記（1979年12月-1986年11月）兼副院長（1979年12月-1986年

11月）となる。1940年代から創作を始める。歌劇劇本『如兄如弟』、歌詞『向大関中進軍』『彭老总下了動員令』の創作、『延安文芸叢書』や『延安文芸史』の編纂に携わる。

白鷹（1918-）：上海人（原籍は武漢）。抗日戦争期は国民救亡歌詠会第三宣伝隊にて戦地での救亡活動をおこなう。八路軍115師団戦士劇社、新四軍独立旅団前鋒劇社などで活躍。1953年、中央戲劇学院教研部第一副主任、表演系副主任、副院長に就任。中国芸術研究院副院長（1978年10月-1986年11月）兼党委員会副書記（1980年5月-1986年11月）。1980年、文化芸術出版社創設に携わる。

李希凡（1927-）：浙江紹興人。1953年山東大学中文系卒業、1954年中国人民大学哲学研究班修了。『人民日報』文芸部編輯者、評論組長、副主任などを経て、1986年11月より中国芸術研究院常務副院長（1996年11月まで）。1949年から評論活動を始める。『紅樓夢評論集』『論中国古典小説の芸術形象』『呐喊』『彷徨』的思想与芸術』の著作や『紅樓夢大辞典』『中華芸術通史』などの編纂に携わる。

以上の経歴は『中国作家協会会員辞典』（作家出版社、2009年）、中国芸術研究院ウェブサイト（<http://www.zgysjy.org.cn/>）の記載などによる。ただし当該辞典には蘇一「萍」と掲載されている。

- 7) 文代会は中華全国文学芸術工作者代表大会（のちに中国文学芸術工作者代表大会と改組）の略称。第1次（49年）、第2次（53年）、第3次（60年）と開催されている。第4次は文化大革命を隔てて79年に開催され、人民共和国建国後30年来の中国共産党による文芸指導のあり方を見直し、思想の解放・民主化を肯定的に位置づけようとしたとされている。
- 8) 民国期の『中国文芸年鑑』についても先行研究はほとんどない。平保兴《〈中国文艺年鉴〉编纂史略》（《年鉴信息与研究》2008年第6期）や吴福辉《全景与杂陈（“第一回”中国文艺年鉴之回顾）》（『汉语言文学研究』河南大学2012年第3卷第1期）などに言及がある。また中華民国が遷移した台湾においては1966年に同名の年鑑が平原出版社から刊行されている。
- 9) それぞれ毛泽东《同音乐工作者的谈话》（1956年8月24日）原載《文艺研究》1979年第3期、周恩来《对在京的话剧、歌剧、儿童剧作家的讲话》（1962年2月17日）原載《文艺研究》1979年第1期、刘少奇《在中国作家协会第二次理事会扩大会议期间同周扬、刘白羽通知的谈话》（1956年3月5日）原載《文艺研究》1980年第3期、陈毅《在戏曲编导工作会上

的讲话》(1961年3月22日) 原载《文艺研究》1980年第2期。例えば毛泽东《同音乐工作者的谈话》は、1956年に中国音楽家協会の幹部会議でおこなった談話の筆記録であるが、当時は発表されておらず、1979年に初めて公表された文章である。また、この談話は、雑誌《人民音乐》1979年第3期などの同時期の刊行物に掲載されたり、単独でパンフレットとしても刊行されている。

- 10) 人民共和国において、特に「四つの近代化」を強力に推進した1980年代以降の鄧小平時代においては、SFは娯楽を主たる目的としたものではなく、科学知識普及のための実際的な工具の一つであった。この分野の研究はようやく近年になって盛んになってきている。
- 11) 李大钊《山中即景》第3首“一年一度果树红，一年一度果花落；借问今朝摘果人，忆否春雨梨花白”(一年に一度果実が紅くなり、一年に一度その花は散る。今朝、農夫にたずねてみた、春の雨に梨の花が白く咲いていたのを憶えていらっしゃいますか)。この詩については楊宝兰《李大钊同志创作的白话诗》(《党史博采》2007年第8期)を参照した。
- 12) 刘锡诚《1982: 给文艺与政治的关系松绑：记中国文联四届二次全委会》(《中华读书报》2012年8月8日)を参照した。
- 13) 83年版までの主編であった蘇一平は79年12月から86年11月まで同研究院の副院長であった。86年11月以降も「常務」のつかない副院長は3名置かれている。また蘇一平が副院長在任中、党委員会書記も兼ねていたのに対して、李希凡はそうではない。86年11月からの党委員会書記は劉穎南。ちなみに同研究院の実質的な最高位は(常務)副院長で、院長は名誉職である。86年11月まで院長を務めたのは、当時文化部副部長の職にあった詩人・劇作家の賀敬之で、その後は文化部部長であった作家の王蒙が継いでいる。